|  |
| --- |
| 尊敬 |
| 憎い |

大造じいさんは、ぐっとじゅうをかたに当て、残雪をねらいました。が、なんと思ったか、再びじゅうを下ろしてしまいました。残雪の目には、人間もハヤブサもありませんでした、ただ、救わねばならなぬ仲間のすがたがあるだけでした。いきなり敵にぶつかっていきました。そして、あの大きな羽で、力いっぱい相手をなぐりつけました。不意を打たれて、さすがのハヤブサも、空中でふらふらとよろめました。が、ハヤブサも、さるものです。さっと体勢を整えると、残雪のむな元に飛びこみました。ぱっ。ぱっ。羽が、白い花弁のように、すんだ空に飛び散りました。そのまま、ハヤブサと残雪は、もつれ合って、ぬま地に落ちていきました。大造じいさんはかけうけました。二羽の鳥は、なおも地上ではげしく戦っていました。が、ハヤブサは、人間のすがたをみとめると、急に戦いをやめて、よろめきながら飛び去っていきました。残雪は、むねの辺りをくれないにそめて、ぐったりとしていました。しかし、第二のおそろしい敵が近づいたのを感じると、残りの力をふりしぼって、ぐっと長い首を持ち上げました。そして、じいさんを正面からにらみつけました。それは、鳥とはいえ、いかにも頭領らしい、堂々たる態度のようでありました。大造じいさんが手をのばしても、残雪は、もうじたばたさわぎませんでした。それは、最後の時を感じて、せめて頭領としてのいげんをきずつけまいと努力しているようでもありました。大造じいさんは、強く心を打たれて、ただの鳥に対しているような気がしませんでした。